

次の問題文を読んで、後の問に答えなさい。

小説家になって、27年という月日が経った。小説家という仕事は、それこそ「生産性」という意味で言えば、無駄な存在だが、違和感をカテ<sup>①</sup>として仕事をしてきた自分たちには、また別の感受性を培ってきたという自負がある。

私には、「何か変じゃない？」という違和感がすべてだった。

その違和感こそが、新しい扉を開ける鍵で、別の世界を創り出すと信じて大切にしてきた。

( a )、今、その違和の質は大きく変容してきている。

『OUI』という、主婦パートの物語を書いたのは1997年だ。

当時は、夫が( I )という家庭で、なぜ妻はパート労働という( II )になるのか、という疑問があった。

パートはダイタイ<sup>②</sup>可能な単純労働で低賃金、景気調節の安全弁を担いもするから、労働者としては、まことに不利だ。( b )、家庭内の性別役割が税制にも反映され、そのまま主婦の労働形態になっていることへの違和であり、疑問だったのだ。

ところが、10年後には労働市場の規制緩和により、女性だけではなく、若い男性の非正規雇用も進むことになる。

『OUI』の取材当時、「娘のバイト代よりもパートの時給が安い」と嘆いていた弁当工場の主婦は、娘のバイト代も自分の時給並に安くなったことを嘆くだけでなく、娘世代や若い男性たちに、自分のパート勤務を奪われることも恐れなければならなくなった。

新自由主義経済のもと、事態はさらに悪くなったのだ。富める国はますます富み、貧しい国は富める国に擽<sup>③</sup>取され続けて、貧しさから抜け出すことができなくなる。となれば、国家は富を維持しようと、( III )のよい労働力への管理を強め始める。

日本において、特にギセイ<sup>④</sup>になったのは若い女性たちだった。  
若い女性労働者の約5割が非正規雇用で低賃金。貧困層を形成しているにも拘(かか)わらず、次世代の労働力を産め、と強制される。

医大の入試も、女性というだけで不利になる。まったくもって、ナメられたものである。

コロナ禍の現在、若い女性の自殺率が上昇していると聞く。カフェで、ふと耳にした若い女性の「どうして12時間も働かなきゃならないんだろう」というつぶやきが蘇(よみがえ)って、胸が痛む。

( c )、企業に都合のよい規制緩和が進むと同時に、管理に都合のよい概念もちゃっかり生まれるのだから

ら、始末に悪い。

「ご存じ、「自己責任」である。違和も疑問も、すべて自己責任という言葉に回収されてしまい、表には出にくくなる。同情とか共感というへⅣ」な言葉は消え、代わりに「共有」という曖昧（あいまい）な語のさばり始めた。

文学や映像もまた、グローバリズムのくびきから逃れることはできない。

かつて文学は、その国家、その民族の、固有の悩みや苦しみを描き、その深い井戸を掘ることで、互いに共通する普遍性を確保することができた。だが、それは**牧歌的**<sup>A</sup>と言えるほど、幸せな時代だったようだ。

今や文学ですらも、世界で通用するためには、市場原理主義の**センレイ**<sup>⑤</sup>を受ける。人種差別、民族差別、性差別、児童虐待、あらゆる種類のクレームを避けるための**ケンエツ**<sup>⑥</sup>が働き、表現は刈りこまれて、滑らかなった美しいものが供される。しかし、**棘**<sup>B</sup>（とげ）を内包しないつるつるの顔をした文学は、人の胸を打つことができるのだろうか。

（ d ） 、 つるつるの美しい顔は、同じ表情、同じ声で、あらゆる場所で、「へ C へ」を語り始める。

「へ C へ」は、あらゆる人間をねじ伏せることのできる、便利な言葉だからだ。

ふと思いついたのは、東日本大震災の翌年に**カイサイ**<sup>⑦</sup>された、イタリア映画祭での光景である。

私が見た作品は、『七つの慈しみ』という東欧の貧しい国から、違法でイタリアに入国した若い女性移民の物語だった。

<sup>⑧</sup>彼女は病院で**カイゴ**の仕事を手伝っているが、孤独で貧しく、どこにも行き場がない。身分証明書欲しさに、死体置き場に忍び込んで死者から盗もうとしたり、赤ん坊を誘拐しようとしたりする。まだ若い彼女の、目の下に出来ている隈（くま）がすべてを表しているような、何ともやるせない作品だった。

終映後、映画監督が舞台上に登場して、質疑応答の時間となった。すると真っ先に、一人の青年が客席から立ち上がった。彼は「自分も映画の仕事をしている」と自己紹介した後、「罪を犯した女性を、なぜ主人公にしたのか？」というようなことを問うた。

<sup>⑨</sup>聞かれた映画監督は**ゼツク**し、「彼女は追い詰められて、それしか方法がなかった」というような答えをしたと記憶している。

私は、その質問に、それまで感じたことのないような違和感を覚えた。まさしく、これまでの違和とは質が変わった、と実感した瞬間だった。

ジャン・バルジャンの昔から、罪と罰は、個人と社会との大問題だったはずだ。質問者は、罪を犯さざるを得ないほど追い詰められる、という状況に想像が及ばないのか、と驚いたのである。

正しき者、正しき行いを描く作品には、確かに「へ V へ」がある。だが、人間の行いは正しいことばかりとは限らない。人間は愚かで、間違いを犯す。

罪を犯した人間は主人公の価値がない、という発想は、虚構における優生思想ではないか。

質問者の言わんとする「正義」は、想像力の及ばないところ、いや、無縁のところ<sup>⑩</sup>に堂々と鎮座して、周囲を睥睨（へいげい）している。まるで、自分が一番偉いかのように。

のちに、似たような質問を、私も受けたことがあった。

『夜の谷を行く』という連合赤軍事件に関わった女性のその後を描いた作品についての、雑誌取材での出来事である。

インタビューに来た若い女性が、「なぜ、彼らは罪を犯したんですか？ 何で法律を犯した人を書くのかわからない」と言う。

その答えは、私にもわからない。わからないことだからで、闇の中を進むのも、また小説を書くことなのである。そして、小説は正解を出すものでもない。その小説世界に生きる人間を描くことしか、できないのである。

（ e ） 、この女性のような若い世代には、「思想」という概念すら消えてなくなっているのだろう、と思うしかなかった。イデオロギーが古びて消えてなくなっても仕方ないが、理念までが消えてしまおうとしたら、人間には何が残るのか、逆に知りたいと思った。理念に突き動かされて、失敗や罪を犯すのも、人間の姿なのだから。

正義と悪、右と左。二元論で語られるほど、人間は単純ではない。むしろビトウインな存在なのに、他人の曖昧は許すことができないらしい。その不寛容は、いったいどこからくるのだろうか。

最近、連合赤軍事件の永田洋子（ひろこ）の弁護をした、女性弁護士さんの講演を聞く機会があった。その女性弁護士さんは、おとし虐待されて亡くなった結愛（ゆあ）ちゃん<sup>E</sup>の母親の弁護も引き受けておられる。

結愛ちゃんの母親は、毎日、夫に正座させられて、何時間も執拗（しつよう）な説教を受けていた。叱責<sup>⑩</sup>され、反省文を書かされる日々が続くと、自信をなくして混乱し、どうしたら叱責されずに済むかしか考えられず、自分がおかれた状況すらもわからなくなったという。

「50年ほど前に、若い人たちが、同じように仲間を苦しめ、死に至らしめたことがありました」

弁護士さんの言葉は、私の心に沁（し）みた。それはもちろん、連綿と続く、人間の愚かさ。そして、罪。<sup>F</sup>

そこには、「犯罪」という言葉だけでは、持つことのできない事実の重みがあり、手ですくおうとしても、掌（てのひら）からこぼれ落ちてしまう、水のように形を留めない事実の儂さがある。

その重さや儂さを積極的に知ろうとしないと、人々は何度も同じことを繰り返すのかもしれない。だから、事実には普遍性があると、私は信じているのだ。事実を単なる「犯罪」という言葉で片付けて、慮ろうともし

ない人々は、傲慢（ごうまん）で不寛容だ。

しかしながら、現実には、またもつるりと身をかわしてみせる。フェイクニュースの存在である。事実の重みと偽さを積極的に知ろうとする、と書いたが、その事実が今や揺らぎを見せている。

フェイクニュースは、あらゆるところに真実のような顔をしてのさばり、容易に人を信じ込ませる。

ネットでひとつ読めば、アルゴリズムで同じような記事が供与されるから、さらに信じ込むようになる。かくして、彼らの信じる「事実」を楯（たて）にして、頑迷で差別的な人々が生まれてくる。

この果てしない追いかけっこが、世紀末的な絶望をもたらして、暗い気持ちにさせる。しかし、絶望していても、仕方がない。私は小説書きなのだから、小説の話に戻ろう。たったひとつ、彼らの振りかざす「正義」と戦う方法がある。小説を読むことだ。

小説は、自分だけの想像力を育てる。言葉は目に見えないものだから、読者一人一人が想像することでは、その小説世界を堪能することはできない。従って、個々人が頭の中で結ぶ像は、それぞれ違っているはずである。そこが、ひとつのイメージを付与するビジュアル作品と違うところだ。

I 他者と違うことが他者を認める礎（いしずえ）となり、他者が取り巻かれている事実を慮る力を養うのである。それが想像力という力だ。

（J）の時代、自由な小説から力を得てほしい、と心から願うものである。

（I）  
（桐野夏生「正義と悪、右と左……人間は二元論では語れない」）

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 空欄（a）～（e）に当てはまる最も適切な接続語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ただし イ しかし ウ おそらく エ また オ つまり  
カ そして キ 結局 ク やはり ケ やがて コ しかも

問三 空欄（I）～（V）に当てはまる最も適切な語句を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- あ カタルシス い ロジカル う フィジカル え コスパ お メッセージ  
か イメージ き ブルーカラー く ホワイトカラー け エモーション  
こ センセーション さ フラストレーション し スタンダード

問四 傍線部A「牧歌的」、E「執拗な」、F「連綿と続く」、H「堪能する」の意味をそれぞれ答えなさい。

問五 傍線部Bの「棘（とげ）」という比喩表現は、具体的には何を象徴しているか、本文中の表現を使って答えなさい。

問六 二箇所ある空欄「（C）」に共通して当てはまる、最も適切な語句を本文中から抜き出して答え

なさい。

問七 傍線部Dに込められた筆者の意図は、本文中で小説がどういうものであると言っていることから来ているのか、筆者の主張に即して説明しなさい。

問八 傍線部Gにある「事実」とは、どういう事実か、本文の文脈を踏まえてまとめなさい。

問九 傍線部Iとはどういうことか、現在の日本の社会状況などを参考にして、自分の興味・関心に基づいて答えなさい。

問十 空欄（J）に当てはまる最も適切なキーワードは何か、本文中から抜き出して答えなさい。

【解答】

国語

問一	①	糧	②	代替	③	さくしゅ	④	犠牲	⑤	洗礼	
	⑥	検閲		⑦	開催		⑧	介護		⑨	ぜっく
										⑩	しっせき

問二	a	イ	b	オ	c	コ	d	カ	e	ウ
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問三	I	く	II	き	III	え	IV	け	V	あ
----	---	---	----	---	-----	---	----	---	---	---

問四	A	(牧歌が聞こえてくるように) 素朴で抒情的なさま。								
	E	粘り強くしつこいこと。意地を張り自分の意見を押し通そうとするさま。								
	F	途絶えずに長く続くさま。長くつながり続いて絶えないさま。								
	H	満ち足りて十分なこと。十分に満足すること。								

問五 人種差別、民族差別、性差別、児童虐待などの、あらゆる種類のクレームの対象になるような差別や虐待のこと。

問六 正義

問七 小説は目に見えない言葉によって成り立っているから、読者一人一人が、自分で想像することでしか、堪能することできない。それゆえに、ひとつのイメージを正解のように付与するビジュアル作品とは違って、個々人が頭の中で結ぶ像が、それぞれ違ってしていることを言っている。

問八 あらゆるところに真実のような顔をしてのさばり、容易に人を信じ込ませるフェイクニュースの記事に書かれた偽りの「事実」のこと。

問九 ※ 自分と他者は違っているという、本来ならば当たり前のことが、最近、ないがしろにされていて、みんな一緒に強要する同調圧力の強いムラ社会的な集団主義や画一主義、自分たちとは違う所を攻撃するいじめ問題など、LGBT+Qという性差や価値観の多様化が言われるようになって生活しているかを問いかけた問題である。身近な社会現象を通して、自分とは違う他者をどのように理解しているか、その理解力の程度によって採点する。

問十 不寛容